

町史

とっておきの話

211

南相馬市博物館学芸員 稲葉 修

只見とっておきの魚たち ①

今月号からの連載6回は、只見の魚たちです。執筆される稲葉さんは、南相馬市博物館に勤務するかわら、魚を追って、福島県のみならず関東、東北まで足を運んでいます。そのほかにも、両生類・は虫類・淡水産二枚貝など幅広く調査されており、県下で、もっともくわしい方です。

只見町には、 どんな魚がいる？

福島県には、「太平洋に流れる浜通り・中通りの川」と「日本海に流れる会津の川」があります。只見町の川は、阿賀野川となつて日本海に流れます。

県内に生息する魚類は、2011年までの調査で110種類ほどであることがわかりました。「太平洋に流れる川」では河口でみられるスズキやボラなどの海の魚を含めて約90種類、「日本海に流れる川」では47種類を確認できました。そのうち、県外からやってきた「国

内外来種」と、外国からやってきた「国外外来種」などの外来種は23種類ほどいます。

では、会津にみられる47種類のうち、只見町では何種類の魚がいるのでしょうか。1990年代から網や釣りなどで採取したり、魚にくわしい町の人から聞き取るという方法で調査してきました。実際に魚を捕り自分の目で確かめることはとても大切ですが、魚の写真や標本を見てもらいながら、むかし住んでいた魚や最近増えてきた魚などを教えてもらおう聞き取り調査は、地元でないと得られない貴重な情報です。こうして集まったデータから、いろいろなことがわかってきました。

まず、今から80年以上前には、少なくとも8科12種類の魚が只見町の川にいたようです。それらは、もともと只見町に生息していた在来種だと思われまます。沢々にはイワナ、只見川や伊南川にはウグイ（ハヤ・アカハラ・セノヨ）、アブラハヤ（ボヤ）、シマドジョウ（ゲナツチヨ）、アカザ（バチイヨ）、陸封型カジカ、カワヤツメ河川型

（ヤツメ）などが多くみられ、海から遡上するアユやサクラマスなどもいました。雪融け水が大量に流れる只見川や伊南川は、瀬と淵が連続して流れていくのが速く、周りの山々からの沢水により水温も低目だったことから、もともと生息していた種類数は少なかったようです。しかし、下流にダムができた昭和3年以降は、サクラマスやサケ、アユ、ウナギなど海からやってくる魚の遡上がなくなつてしまいました。その後、昭和30年代に完成した田子倉湖や滝湖でワカサギやコイが放流され、河川にはアユなどが放流されるようになり、また、この放流に混じつて、オイカワ（ヒメマス）やモツゴ、トウヨシノボリなどの国内外来種がみられるようになってきたと思われまます。また、1990年代以降、オオクチバス（ブラックバス）やブルーギルなどの国外外来種も確認されるようになりました。

これらの移り変わりをへて、現在では12科28種類の魚が

只見町の川やダム湖で確認されています。しかし、この28種類のうち、只見町にもといた在来種は10種類くらいです。只見町の川に残つたわずかな在来種は、この先どうなるのでしょうか。開発や改修でいなくなつてしまわないか心配です。これから先どうやって守っていくのか、私たちに突きつけられた宿題です。



珍しい魚になつた
只見町の在来種シマドジョウ